

言葉と歌と息のあいだにいのちを描く：小沢昭一『日本の放浪芸』における声の文化  
Drawing a Life Between Words, Lyrics and Breath Sounds : Orality on Shoichi Ozawa's  
Itinerant Arts of Japan

鈴木 聖子 Seiko Suzuki

俳優・小沢昭一（1929-2012）が1971年に発表したLPレコード集『ドキュメント・日本の放浪芸』（7枚組、ビクター）には、お正月の万歳、瞽女唄、いたこの口寄せ、流しの芸、見世物の呼び声、テキヤの啖呵売、節談説教など、彼が日本各地を歩いて録音した芸能が収められている。小沢によって選ばれたこれらの芸能の共通点は、旅をして門付けするということにある。ゆえに彼はこれらを「お金に換える芸」と呼び、「放浪芸」と名付けたのである。このLP集は予想外の売れ行きをみせたため、ビクターは小沢と共に、『又日本の放浪芸』（5枚組、1973）、『また又日本の放浪芸』（6枚組、1974）、『まいど…日本の放浪芸』（4枚組、1977）と続けて制作を進めた。

小沢は『日本の放浪芸』に着手する前に、新劇俳優として新しい方向性を模索し、すでに香具師の話に浮かれ節を取り入れた一人芝居を演じていた。その後、話芸の起源としての節談説教（浄土真宗に発達した節を伴う説教）に影響を受けた。節談は語りに抑揚をつけて人を説得しようとすることから、落語や浪花節のようでありながら、言葉と歌の間を揺れ動くことを特徴とする。『日本の放浪芸』に収録された節談の名説教者の声は反響を呼び、消えかけていた節談説教を復活させる力となった。また自らもそれを各地の舞台で演じた。

小沢の節談の活動は、『日本の放浪芸』の続編の出版と並行して、舞台よりもラジオへと向かっていく。2016年の小沢の死の寸前まで続く長寿番組となるラジオ番組「小沢昭一の小沢昭一的こころ」が始まったのは、1973年1月である。その同じ年、彼は『夢の・・・』という節談を使ったラジオ作品を作っている。これは節談を特集した『また又日本の放浪芸』（1973）の最後に収録された。使われた音声の内容は、小沢が節談説教を北陸に探し歩いていた時に会った「あるおばあちゃん」へのインタビューの録音と、名説教者の故・のりきよぶんゆう範浄文雄師らの節談の録音である。小沢はこの作品で、一度死んで戻ってきたというおばあちゃんが、あの世で範浄師が待っているのを見たからもう死ぬのも怖くないと嬉しそうに語る声、おばあちゃんの絶え絶えな呼吸音、そして最後にこの作品の製作中におばあちゃんが死んだことを告げる小沢自身の語りによって、一人の人間の生と死の「実況」を行っている。文学でも音楽でもなく、言葉と歌と息のあいだで揺れ動くことによって、定めでは描くことのできない人の命の形を描いたのである。

『日本の放浪芸』に集められた芸能が声を重視するものが多いということは、LPレコードという媒体の性質に由来することは確かだろう。だが『日本の放浪芸』は、スタジオ録音による学術的な保存のための録音資料集ではなく、実況録音によるインタビューや小沢自身の語りが挟まれた、発信のための「ドキュメント」作品であった。この作品は、高度経済成長とテレビの普及という時代背景において、人のいのちや生活と寄り添う声の文化が消失していくということに対する、小沢の声による反対声明でもあったのである。